

# 陽明文庫藏黑谷上人繪詞拔書

高橋貞一

この黒谷上人繪詞拔書は、楮紙、袋綴、縦二七糎、横二三糎、書簡の裏に記したもので文安四年の書寫である。黒谷上人繪詞四十八卷の成立を研究するには精密に比較検討すべき資料である。既に井川定慶博士の法然上人傳全集の中にも、翻印せられて周知のことではあるが、不備があるので、原本を忠實に翻印して研究者の便に供したいと思ふ。

黒谷上人繪詞拔書 法然上人源空 實名也

夫以レハ我本師釋迦如來ハ普流浪三界ノ迷徒ヲ救ハンカ

爲ニ深ク平等一子ノ悲願ヲ發坐シマスニ依テ忽ニ無勝

庄嚴ノ化ヲ隱テ恭ク娑婆濁惡ノ國ニ入給ヨリ以來非

生ニ生ヲ現ノ無憂樹ノ花咲ヲ含非滅ニ滅ヲ唱テ堅

固林ノ風心ヲ痛シム在世八十箇年ノ慈雲等ク群生ニ

覆ヒ滅後二千餘廻法水猶三國ニ流教門シナ殊ニ

利益是區也其中ニ聖道ノ一門ハ穢土ニノ自力ヲ勵マシ

濁世ニ有テ得道ヲ期ス但恐ハ時澆季ニ及テ二空ノ月

陰安心塵縁ニ馳テ三惡ノ焰免難シ煩惱具足ノ凡夫　オ」

順次ニ輪廻ノ里ヲ出ヌヘキハ只是淨土ノ一門ノミ也付之ニ諸家

解尺蘭菊ニノ美ヲ恣ニスト雖トモ唐朝ノ善導和尚弥陀

ノ化身トノ独本願ノ深意ヲ顯ハシ我朝ノ法然上人勢至ノ

應現トノ專稱名ノ要行ヲ弘メ給フ和漢國異レトモ化導

一致ニシテ男女貴賤信心ヲ得安紫雲異香往生ノ瑞顯繁シ

念佛ノ弘通爰ニ尤盛也トス然ニ上人遷化ノ後星霜稍積レリ

教誠ノ語利益ノ跡人漸此暗ンセス若注シテ後代ニ留スハ

誰賢ヲ見テ等カラシ事ヲ思出離ノ要路在事ヲ知ン依之

廣ク先聞ヲ問ラヒ普旧記ヲ勘ヘ實ヲ<sup>ニラヒ</sup><sup>アヤリ</sup><sup>タシ</sup>悞<sup>ヲ</sup>糺<sup>テ</sup>粗始終ノ

行狀ヲ錄スル所也愚ナル人ノ覺安ク見ン者ノ信ヲ勸ンカ爲ニ　ウ」

數軸ノ繪圖ニ顯シテ万代ノ明鑒ニ備フ往生ヲ冀ハン輩

誰カ此志ヲ好ミセサラン

一  
抑上人ハ美作國久米ノ南條稻岡ノ庄人也父ハ久米ノ押領使漆ノ時國

母ハ秦氏也子ナキ事ヲ歎テ夫婦心ヲ一ニシ佛神ニ祈申ニ秦氏夢ニ

剃刀ヲ吞ト見テ則懷妊ス時國カ云汝妊メル所定テ是男子ニノ

一朝ノ戒師タルヘシト秦氏其心柔和ニノ身ニ苦痛ナシ堅酒肉

五辛ヲ斷テ三宝ニ歸スル心深リケリ遂ニ崇徳院ノ御宇長

承二年四月七日午正中ニ秦氏惱事ナクシテ男子ヲ産ム

所生ノ小兒字ヲ勢至ト號ス竹馬ニ鞭ヲ舉齡ヨリ其性賢ノ

成人ノ如シ動ハ西ノ壁ニ向居癖アリ天台大師童稚ノ行狀ニタカハ

スナン侍リ

上人或山僧ト參会ノ事侍ケルニ彼僧ノ云淨土宗ヲ立給フナルハ

何ノ文ニ依テ立給フヤト尋ヌル時善導ノ觀經疏ノ附屬ノ

文也ト答給

一 一心專念仏弥陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨是名「オ」

正定之業順彼願故ノ文ニ至テ末世ノ凡夫弥陀ノ名號ヲ

稱念セハ彼仏ノ願ニ乘シテ慥カニ往生ヲ得ヘカリケリト云理ヲ思定

給ヌ此ニ依テ承安五年ノ春生年四十三立ロニ餘行ヲ

捨テ一向ニ念佛ニ歸シ給ニケリ

一 三重ノ念仏分散ノ間シメン一ニハ摩訶止觀ニ明ス念佛二ニハ往生

要集ニ勸ル念仏三ニハ善導ノ立給ヘル念佛也トテ委此ヲ演給フ

文義廣薄ニノ智解深遠也<sup>ヨレイ</sup>眞<sup>マコト</sup>嶺ノ頂ヲ仰カ如也蓬瀛<sup>ユイ</sup>ノ底ヲ

望ニ似タリ

一  
故上人弁阿ニ教給シハ善導ノ御心ハ淨土ヘ參ラント思ン人ハ必三

心ヲ具メ念仏ヲ申ヘキ也一ニハ至誠心ト云ハ實ニ往生セント思

取テ念仏ヲ申也二ニ深心ト云ハ我身ハ罪惡生死ノ凡夫也然ニ

弥陀ノ本願ノ忝ニ依テ此念仏ヨリ外ニ我身ノ助カルヘキ事ナシト

堅信スルヲ申也三ニ廻向發願心ト云ハ只一筋ニ極樂ニ參ランスル

爲ノ念仏也ト思ヲ云也是ソ法然上人ニ習傳奉ル三心ニテ待ル此外ニ

全別ノ様ナキ也又故上人仰ラレ候シハ在家ノ暇ナカラ人ハ「ウ」

一万二万ナトモ申ヘシ僧尼ナント、テサマヲモカヘタラン驗ニハ三万

六万ナントヲ申ヘシイカニモ多申ニ過タル法門ハ有ヘカラス詮スル

所此念仏ハ決定往生ノ行也ト信ヲ取ヌレハ自然ニ三心ハ具足

ノ往生スルソトヤス／＼ト仰ラレ侍シ也若ノ是習ハヌ事ヲ習

タリト云ヒ仰ラレヌ事ヲ仰ラレタリト申侍ラハ三世ノ諸佛

十方菩薩殊ニハ憑奉所ノ釈迦弥陀觀音勢至善導

聖靈念仏守護梵天帝釈等ノ御哀ナクシテ現世後世カナ

ハヌ身ト成侍ン上人口決ノ次第誓願嚴重也其上此聖既ニ

奇瑞ヲ顯ハシテ往生ヲ遂ラレヌ得益法門ニ契<sup>カネフ</sup>所述誰カ  
信受セサラン

一

天王寺ト申ハ極樂補処ノ觀音大士聖德太子ト生テ仏法ヲ此國ニ弘メ給  
シ最初ノ伽藍也欽明天皇ノ御爲ニ七日ノ念仏ヲ勤メ給ヒ善光寺ノ如來ヘ御  
書ヲ進セラル其御書

名号ヲ稱揚ル<sup>一</sup>七日已ヌ此ハ斯レ爲メ也報シカ廣大ノ恩ヲ仰キ願ハ本師弥陀尊助テ我濟度ヲ  
常護念シ玉ヘ命長七年<sup>丙寅</sup>二月十三日ト侍リケルニ如來御返事　オ<sup>一</sup>

一念ノ稱揚スラ無<sup>ニ</sup>恩留<sup>一</sup>何況七日ノ大功徳ヲヤ我待<sup>ニ</sup>衆生<sup>ニ</sup>ヲ心無間  
汝能濟度センニ豈不<sup>ニ</sup>ンヤ護二月十三日　善光

第二度ノ御消息　第三度以上略之

此御消息ニソ此國ハ念仏三昧ノ有緣ナル事モ顯ニケル彼ノ鳥居ノ  
額ニモ釈迦如來轉法輪所當極樂土東門中心トソカ、レテ侍ル我國ニ  
生ヲ受ン人ハ尤モ此念仏門ニ歸ヘキ者也

一

僧都指入テ未爲直ヌ程ニ此度イカ、シテ生死ヲ離候ヘキト申サレケレハ  
南無阿弥陀佛ト唱テ往生ヲ遂ニハシカストコソ存候ヘト申サレケレハ僧都  
誰モサハ見及テ侍リ但念仏ノ時心ノ散乱妄念ノ起候ヲハイカ、シ  
候ヘキト上人宣ハク欲界散地ニ生ヲ受者心豈散乱セサランヤ

## 一

煩惱具足ノ凡夫爭カ妄念ヲ留ヘキ其條ハ源空モ力及候ハス

心ハ散乱レ妄念ハ競發ト雖トモ口ニ名号ヲ唱ヘハ弥陀ノ願力ニ

乗メ決定往生スヘシト仰ラレケレハ是承リ候ハン爲ニ參ノ候ツル

トテ僧都驪テ退出シ給ケリ初對面ノ人一言世間ノ礼儀ノ詞

無メ退出セラレヌル事ヨトテ人々貴ケリ上人内ヘ入給テ心ヲ靜メ

妄念ヲ發ス而念仏セント思ンハ生付ノ目鼻ヲ取捨テ、念仏セント

思ハンカ如シアナコト々シトソ仰ラレケル

蘭城寺長吏大貳僧正公胤上人ヲ誹謗ノ公胤カ見タラン文ヲ法然

房ノミヌハ有トモ法然房ノ見タラン事ヲ公胤カミヌハヨモ有シト

自嘆シテ淨土決疑抄三卷ヲ記ノ選撰集ヲ破ス學仏房

ヲ使者トメ上人ノ室ニ送ル、時上人彼使ニ對テ是ヲ披見

シ給ニ上卷ノ始ニ法花ニ卽往安樂ノ文アリ觀經ニ讀誦大

乗ノ句アリ讀誦極樂ニ往生スルニ何ノ妨カ有ン然ニ讀誦大

乗ヲ廢ノ只念仏許ヲ付屬スト云是大ナル誤也ト云リ

此文ヲ見給テ終ヲミス閣テノ給ハク此僧都是程ノ人ト思ハ

サリツ無下ノ事也一宗ヲ立トキカレハ癡立ノ旨ヲ存スラント

思ハルヘシ然ニ法花經ヲ以テ觀經往生ノ行ニ入ラル、事宗

ウ

義ノ癡立ヲ忘ニ似タリ若ヨキ學生ナラハ觀經ハ是尅前ノ

教也彼中ニ法花ヲ接スヘカラストソ難ラルヘキ今ノ淨土宗ノ  
心ハ觀經前後ノ諸大乘經ヲ取テ皆悉往生ノ行ノ中ニ接スオ

何ソ法花ヒトリ漏ヤ普攝ル心ハ念仏ニ對ノ是ヲ癡シカ爲也

ト宣給ケレハ使歸テ此由ヲ語ニ僧都口ヲ閉テ言說ナカリケリ

余事ニ亘<sup>ワタルケシウ</sup>玄憚<sup>ウヰ</sup>ヲクエンクキト僧都ノ申サレケレハ其宗ノ人ノ

申侍シハクエンウントコソ申侍シカ<sup>ウヰ</sup>暉<sup>ウヰ</sup>書テコソクキトハヨミ侍レ憚ト

書テハウントコソヨミ侍レト直申サレキ惣メ如此誤共七ヶ條マテ

直レシカハ僧都退出ノ後弟子等ニ語レケルハ今日法然房對面メ

七ヶ條ノ僻事ヲ直タリ常ニ見參セハ才學ハ付侍ナン立所

ノ淨土法門聖意ニ違ヘカラス仰テ信スヘシ彼ノ上人ノ義ヲ

謗スルは大ナル過也トテ則製作ノ決疑抄三卷ヲ燒ニケリ

一 上人終焉ノ期近付給一筆ノ狀云モロコシ我朝ニ諸ノ智者達沙汰

シ申サル、觀念ノ念ニモ非ス又學問ヲメ念(仏)ノ心ヲ悟テ申念仏

ニモ非ス只往生極樂ノ爲ニハ南無阿彌陀仏ト申テ疑ナク往生

スルソト思取テ申外ニ別ノ子細候ハス但三心四修ナント申事ハ

皆決定ノ南無阿彌陀仏ニテ往生スルソト思ノ中ニ籠候也此外ニ

奥深キ事ヲ存ハ二尊ノ御慈ニハツレ本願ニ漏候ヘシ念佛ヲウ

信ン人ハ縦ヒ一代ノ法ヲ能々學ストモ一文不知ノ愚鈍ノ身ニナシテ

尼入道ノ無智ノ輩ニ同メ智者ノ振舞ヲセスシテ只一向ニ

念仏スヘシト云々 正シキ御自筆ノ書也

一 上人ノ病中ニ何クトモナク車ヲ寄ル事有リ貴女車ヨリオリテ

上人ニ謁給フ折節(ミセケチ)タ、勢觀房一人障子ノ外ニテキ、給ケレハ

女房ノ音ニテ今シハシトコソ思ヒ給ニ御往生ノ近付侍ランコソ無下ニ

心細侍レサテモ念仏ノ法門御後ニハ誰ニカ申置侍ラント申サルレハ

上人源空所存ハ選撰集ニ載侍リ此ニ違ハス申サンスル者ソ源空

カ義ヲ傳タルニテ侍ヘキト云々其後シハシ御物語アリテ返給其

氣色直人ト覺サリケリ其程ニ勢觀房車ノ行末ユクエ覺束ナク

覺テ見入トシ給ニ河原ヘ車ヲ遣出テ北ヲ指テ行カカキケス

様ニミエスナリニケリ恠事限ナシ歸テ上人ニ客人ノ貴女誰人ニカ

オハスラント尋申サレケレハアレコソ韋提希夫人ヨ賀茂ノ邊ニ

オハシマス也ト仰ラレケリ勢觀房親リ此不思議ヲ感見セラレ

ケル故ニ上人遷化ノ後ハ社壇近ク居ヲトメテ常ニ參詣ヲオ

ナンセラレケル



一 月來ノ安心ヲ印治セシカ爲ニ上人ヲ尋申サレケルニ就テ御返事ニ云

凡夫ノ生死ヲ出ル事往生淨土ニハシカス往生ノ業多ト雖トモ

稱名念佛シカス稱名念佛ハ是彼仏ノ本願ノ行也故ニ善

導和尙ノ給ク若我成仏十萬衆生稱我名号下至十聲

若不生者不取正覺彼仏今現在世成仏當者本誓重願

不虛衆生稱念必得往生故ニ稱名往生ハ是弥陀本願也

念佛ノ時此觀ヲナスヘシ本願誤給ハス必ス引接ヲ垂給ヘト

此外ニハ別ノ觀行入ヘカラス

一 文治二年ノ秋ノ比上人太原ヘ渡リ給フ東大寺ノ大勸進俊乘房

天台座主權僧正願真之事也

重嚴未出離ノ道ヲ思定メサリケルヲ慈給テ此由ヲ上人ヨリ

告仰ラレケレハ弟子卅餘人ヲ相具メ太原ニ向フ勝林院ノ

丈六堂ニ会合ス上人ノ方ニハ重嚴以下ノ弟子共其數

集レリ法印ノ方ニハ門徒以下並ニ太原ノ聖達坐烈レリ山門ノ

衆徒ヲ始トメ見門ノ人多リケリ論談往復スル事 ウ」

一日一夜也上人法相三輪花嚴法花眞言仏心等ノ諸宗ニ渡テ

凡夫ノ初心ヨリ仏果ノ極位ニ至マテ修行ノ方軌得度ノ相良

具ニ演給テ此等ノ法皆義理深ク利益勝タリ機法相應セハ

陽明文庫藏黒谷上人繪詞拔書

得脱踵ヲメクラスヘカラス但源空如キノ頑愚ノ類ハ更ニ其器ニ  
非ス故ニ覺難ク惑安シ然間源空發心ノ後聖道門ノ諸宗ニ

付テ廣出離ノ道ヲ訪ニ彼モ難ク此モ難シ是則世下人愚

ニノ機教相背ケル故也然ヲ善導ノ尺義三部ノ妙典ノ心弥陀

ノ願力ヲ強緣トスル故ニ有智無智ヲ論セス持戒破戒ヲ簡ハス

無漏無生ノ國ニ生テ永ク不退ヲ証スル事只是淨土ノ一門念仏ノ

一行也トテ法藏ノ因行ヨリ弥陀ノ果德ニ至マテ理ヲ竟詞ヲ

盡シ畢テ但是自身涯分ヲ演計也全上機ノ解行ヲ

妨トニハ非スト宣給ケレハ法印ヨリ始メテ滿座ノ衆皆信伏シニケリ

形ヲ見レハ源空上人實ニハ弥陀如來ノ應現歟トソ感歎シケル

受教ト發心トハ各別ナル故ニ習學スルニハ發心セサレトモ

境界ノ緣ヲ見テ信心ヲ發シケル也人ナミ〱ニ淨土ノ法ヲ  
「オ」

聞キ念佛ノ行ヲ立トモ信心未タ發ラサラン人ハ只懃ニ心ヲ

懸テ常ニ思惟シ又三寶ニ祈リ申ヘキ也トソ仰セラレケル

虛假トテカサル心ニテ申ス念佛カ往生セヌ也決定往生セント

思ハハ飭心無ノ實ノ心ニテ申ヘシ朋同行ハ云ニ及ハス其外常ニ

馴見ル妻子眷属ナレトモ東西ヲ弁ル程ノ者ニ成ヌレハソレカ爲ニ

必飭心ハ發也人ノ中ニ住ンニハ其心ナキ凡夫ハ有ヘカラス  
惣親キモ疎キモ貴モ賤モ人ニ過タル往生ノ怨ハナシ其カ爲ニ  
飭心ヲ發シテ順次ノ往生ヲ遂サレハ也只常ニ人交テ靜ル  
心モ無飭心モ有ラン者ハ夜サシ深テ見人モ無聞人モ無シ時  
忍ヤカニ起居テ百反ニテモ千反ニテモ多少心ニ任テ申サン  
念仏ノミソ飭心ナケレハ仏意ニ相應メ決定往生ハ遂ヘキ  
此心ヲエナハ必シモ夜ニハ限ヘカラス只人聞憚無ラン所ニテ  
常ニ如此申ヘシ所詮決定往生願フ實ノ念仏申サンスル飭ラヌ  
心根ハ譬ハ盜人有テ人ノ寶ヲ思懸テ盜ント思心ハ底ニ  
深レトモ面ニハサリケナキ様ニ持成テ構恠ナル色ヲ人ニ「ウ」  
ミエシト思ンカ如シ其盜ミ心ハ人全シラネハ少モ飭ラヌ心也  
決定往生センスル心モ又如此人多集リ居ラン中ニテモ  
念仏申ス色ヲ人ニミセスシテ心ニワスルヘシキナリ  
其時ノ念仏佛ヨリ外ハ誰カ此ヲ知ヘキ念知セ給ハ、  
往生何疑ハン

眞僞ノ二類アリ、地身僞性ニノ飭心有者ハ身ノ爲ニ  
要ナキ聊ノ事ヲモ必ス僞リ飭也元ヨリ實ノ心有テ

虚言せヌ者ハ聊ノ矯飭<sup>ケウシヨウ</sup>ノ身ノ爲大ニ其益有ヘキ  
 事ナレトモ身ノ利養ヲハ顧ス底ニ實有テ少シモ  
 飭心ナシ是皆本性ニ受而生タル所也

以上上卷 畢

上人タ、諸家ノ教門ニ明ナルノミニ非ス修行多ク其證ヲ得  
 給キ其上四明黒谷ニノ法花三昧ヲ行給時普賢白馬  
 ニ乗テ親リ道場ニ現給又上人或時叡空上人並ニ西仙房ト  
 共ニ行給ケルニ山王影向ノ納受ノ形ヲ顯シ給ケリ是末代  
 ノ奇特也

一

上人黒谷ニノ花嚴經講給ケルニ青キ蛇机<sup>ツクエ</sup>ノ上ニ有ケルヲ  
 法蓮房信空ニ取テ捨ヘキヨシ仰ラレケレハ法蓮限ナク蛇<sup>ツル</sup>ニ畏  
 人ナリケレトモ師ノ命背キ難ニ依テ出文机<sup>ツクエ</sup>ノ明障子ヲ  
 アケ儲テ塵取ニ掃入<sup>ハキ</sup>テ投捨テ、障子ヲ立テケリ歸テミレハ  
 蛇猶元ノ所ニ有ケリ此ヲミルニ遍身ニ汗出テ畏<sup>フソシ</sup>カリケリ  
 上人見給ナト取テハ捨ラレヌソト仰ラレケレハ然々ト答上人  
 默然トノ物モノ給サリケリ其夜法蓮夢ニ大龍形ヲ

現シ我ハ是花嚴經ヲ守護スル所ノ龍神也ヲソル、事勿ト云ト

思テ夢覺ニケリ昔此經龍宮ニ有テ人間ニ流布セス

龍樹菩薩龍宮ニ行テ此ヲ披キ見テ人間ニ還テ此ヲ

弘給キ其後覺賢三藏震旦ニモ安帝義熙十四年

三月十日ヨリ楊州謝司空寺ニ護淨花嚴法堂ヲ

建テ、花嚴經ヲ譯シ給時堂ノ前ノ蓮花池ヨリ毎日ニ「ウ」

青衣ナル二人ノ童子朝ニ出、塵ヲ拂ヒ墨ヲ磨リ暮レハ池ノ

底ヘナン入ケル經ヲ譯シ畢テ後ハ見ス成ニケリ此經久龍宮

ニ在故ニ龍神敬守護ヲ加ヘ侍ケルニコソ上人披講實至テ

龍神ヲ感セシメ給ケルユ、シクソ侍ル

一

上西門院深上人ニ歸御テ念仏御志淺ラサリケリ或時上人ヲ請  
申サレテ七日說戒在リ円戒ノ奥旨ヲ演給ニ一ツノ蛇唐

垣ノ上ニ七日間ハタラカス而聽聞氣色在リ見人恠思程ニ

結願ノ日ニ當彼蛇死セリ其頭ノ中ヨリ一ツノ蝶出、空ニ昇

ト見人モアリ天人ノ形ニテ昇トミル人モアリケリ昔惠表比丘

武當山ニノ無量義經ヲ講讀セシニ音ヲ聞青雀歡喜苑ニ

生セリ彼先蹤ヲ思ニ此小蛇モ大乘結緣ニ依テ天上ニ生レ

侍ニヤ

一 上人祕密ノ窓ニ入り觀念ノ床ニ坐給シニ或時ハ蓮花顯レ

或時ハ羯磨<sup>カッマ</sup>ヲ見或時ハ寶珠ヲ拜ス觀心明了ニノ瑞相ヲ

眼前ニ顯給事多カリケリ  
「オ」

一 別當入道惟方卿娘粟田口ノ禪尼ハ上人往生ノ後二月

十三日ノ夜ノ夢ニ上人ノ墳墓ニ參タレハ八幡ノ寶殿ナリ

御戸ヲ開タルニ御正躰御マス傍ナル人其御正躰ヲ指テ

是コソ法然上人ヨト云ヲ聞テ信心發リ身モイヨタチ汚<sup>アセ</sup>

流ルトミル

一 或時東燭ノ程ニ上人ノトカニ聖教ヲ披覽シ給音ノシケレハ

正信房未燈ナトモ奉トモ覺サリツルニト覺東無テ密カニ座下

ヲ伺ニ左右ノ御目ノスミヨリ光ヲ放テ文ノ面ヲ照ラシ給フ

其光明ナル事燈ニ過タリイミシク貴コト限ナシカヤウノ

内證ヲハ深く隱密ス事ニテ侍ニト思テ拔足ヲノ罷出ヌ也

一 上人仰ラレケルハ其極樂ノ主シニテ御ス阿弥陀仏コソ何事モ

知ヌ罪人共ノ諸仏菩薩ニモ捨ハテラレ十方淨土ニモ門ヲ指

レタル輩ヲヤス〜ト助濟ハント云願ヲ發テ十方世界ノ衆生

ヲ來迎給フ仏ヨ心ヲ靜メテ能々聞ルヘシ唐土ヨリ日本ニ渡タル

一切經ハ五千餘卷アリ其中ニ雙卷無量壽經觀無量壽經　ウ」

小阿弥陀經也普法藏比丘ト申シ、入道四十八願ヲ建テ、極樂

淨土ヲ建立シ一切衆生ヲ平等ニ往生セシメン其ニ我仏ニ成タラン時

ノ名ヲ稱念セン衆生ヲ來迎セント云フ願ヲ起テ眞實ニ往生

セント思テ念仏申衆生ヲ迎置テ佛ニ成給也四十八願ノ中ノ

第十八ノ願是也トテ本願ムネノ虛カラルサル謂レ念佛メ往生スヘキ

趣細カニ授ラレケリ此聖不審事共ヲ尋申ニ付テ上人御

返事條々

一

念仏ノ機ハ只生付ノ儘申也智者ハ智者ニテ申テ生レ愚者ハ愚者

ニテ申テ生レ道心有人モ申テ生道心無人モ申テ生乃至富

貴者貧賤者モ慈悲有者慈悲無者モ欲深者腹惡者モ

本願ノ不思議ニテ念仏タニモ申セハ何モ皆往生スル也念仏ノ

一願ニ万機ヲ攝テ發給ヘル本願也只コサカシク機ノ沙汰ヲ

セスノ一向ニ念仏タニモ申セハ皆悉往生スル也サレハ念仏往生ノ

義ヲ深モ難モ申サン人ヲハツヤ／＼本願ノ理ヲシラサル人也ト

心得ヘキ也淨土一宗ノ諸宗ニ超ヘ念佛ノ一行ノ諸行ニ　オ」

勝タリト云事ハ万機ヲ攝スル方ヲ云也理觀菩提心

讀誦大乘眞言止觀等何モ仏法ノ疎ニマシマスニハ非皆生死滅度ノ法ナレトモ末代ニ成ヌレハ力及ハス行者ノ不法ナルニ依テ機カ及ハヌ也念仏門ニ至テハ時ヲ云ヘハ末法万年ノ後人壽十歲ニ促<sup>ツク</sup>リ罪ヲイヘハ十惡五逆ノ罪人也老少男女ノ輩一念十念ノ

類ニ至マテ皆是擲取不捨ノ誓ニ籠也此故ニ諸宗ニ超

諸行ニスクレタリトハ申也

一

何ニモ念仏ノ申レン方ニ依テ過ヘシ念仏ノ障ニ成ヌヘカラン事ヲハ厭捨ヘシ一所ニテナクハ修行メ申ヘシ修行メ申サレスハ一所ニテ申

ヘシ聖テ申レスハ在家ニ成テ申ヘシ獨籠居メ申サレスハ同行

ト共ニ行メ申ヘシ衣食叶ハスメ申サレスハ他人ニ助ラレテ

申ヘシ妻子モ從類モ自身ヲ助ケラレテ念佛申サン爲ナリ

念仏ノ障リニ成ヌヘカラン事ハ努々ナスヘカラス

一

聖道門ハ深シト雖ヘトモ時過ヌレハ今ノ機ニ叶ハス淨土門ハ淺ニ似タレトモ當根ニ叶安ト云シ時キ末法万年余經悉滅弥陀一教利物ウ

偏増ノ道理ニ折テ人皆信伏シキ

一

毗沙門堂ノ法印明禪ハ參議成賴卿ノ息顯宗ハ壇那院ノ

嫡流智海法印ノ面受密宗ハ法曼院ノ正統仙雲法印ニ受ク



顯密ノ棟梁山門ノ英傑ナリ然トモ道心ニ催シ陰遁ノ思深

カリキ初發心ノ因縁ヲ語申サレケルハ最勝講ノ聽衆ニ參シ

タリシニ緇素貴賤今日ヲ晴トノミ思敢リ夢幻泡影片時

ノ榮ヲ忘サル者一人モ非ス俗家ニハ大將ノ庭上ノ事カラ大裏ノ

門外ノ振舞僧中ニハ證義者ハ上堂ヲ具ノ別座ヲ儲ケ

攝錄ノ息ハ隨身ヲ隨ヘテ直廬ニ參セラル彼此ノ榮耀ヲ

ミテ見聞ノ輩走廻レル有様ツクゝト思ヘハ無常忽ニ至ナハ

餘算イツマテトカ期セン無上ノ念忙ヲ見ニ付テ胸中ノ

觀念澄増ル儘ニ陰遁ノ思此時治定セリト申サレケル彼法印

ハ天台ノ宗匠ナリシカトモ選擇集ヲ見テ後ハ偏ニ上人ノ勸化ヲ

信ノ心ヲ金池ノ波ニ寄セ今ハ只畢命ヲ期トセン許也トテ專修

專念ノ行懈ナク念仏往生ノ營他事ナカリキ　オ」

上人宣ク自他宗ノ學者宗々所立ノ義ヲ各別ニ心得スシテ

自宗ノ義ニ異スルヲ皆僻事ト心得タルハ謂レナキ事也宗々

皆各立ル所ノ法門各別ナル上ハ諸宗ノ法門一同ナルヘカラス

皆自宗ノ義ニ違スヘキ條ハ勿論ノ事也トソ仰ラレケル

又云口傳無シテ淨土ノ法門ヲミルハ往生ノ得分ヲミ失也其故ハ

極樂ノ往生ハ上天親龍樹ヲ勸メ下ハ末世ノ凡夫十惡五逆

ノ罪人マテ勸給ヘリ然ヲ我身ハ最下ノ罪人ニテ善人ヲ勸

給ヘル文ヲミテ卑下<sup>ヒダ</sup>ノ心ヲ發シテ往生ヲ不定ニ思テ順次ノ

往生ヲ得サル也然レハ善人ヲ勸給ヘル所ヲハ善人ノ分トミ惡人

ヲ勸給ヘル所ヲハ我分トミテ得分ニスル也如此見定ヌレハ決定

往生ノ信心堅マリテ本願ニ乘ノ順次ノ往生ヲ遂也

## 一

又云他力本願ニ乘ルニニアリ乘セサルニニアリ先乘サルニ二ト云ハ一ニハ

罪ヲ作ル時乘セス其故ハ如此罪作ハ念仏申トモ往生不定也ト思時乘セス

二ニハ道心ノ發時乘セス其故ハ同ク念仏ヲ申トモ如此道心有テ申サン

念仏ニテこそ往生ハセンスレ無道心ニテハ念仏ストモ叶フヘカラスト道心ヲ  
ウ

先トノ本願ヲ次ニ思時乘セサル也次ニ本願ニ乘スルニ二ノ様ト云ハ一ニハ

罪ヲ作時乘スル也其故ハ如此罪ヲ造レハ決定ノ地獄ニ墮ヘシ然

トモ本願ノ名号ヲ唱レハ決定往生セン事ノウレシサヨト悅時乘

スル也二ニハ道心ノ發時ニ乘スル也其故ハ此道心ニテ往生スヘキニ非ス是程ノ

道心ハ無始ヨリ已來タ發レトモ未生死ヲ離レス故道心ノ有爲ヲ

論セス造罪ノ輕重ヲ云ハス只本願ノ稱名ヲ念々相續セン力ニ依テ

ソ往生ハ遂ヘキト思時ニ他力本願ニ乘スル也

一 又云念佛申ニハ至別様ナシ只申セハ極樂ヘ生ト知テ心ヲ至申ハ參也

一 又云南無阿弥陀仏ト云ハ別タル事ニハ思ヘカラス阿弥陀仏ケ我ヲ助給

ヘト云語ト心得テ心ニハ阿弥陀仏助給ヘト思テ口ニハ南无阿弥陀仏ト唱

ヲ三心具足ノ念仏ト申也

一 又云縱余事ヲ營トモ念仏ヲ申〜此ヲスル思ヲナセ余事ヲシ、

念仏ストハ思ヘカラス

一 又云名号ヲ聞ト云トモ信セスハ聞サルカ如シ縱信スト云トモ唱ヘスハ

信セサルカ如シ只常ニ念仏スヘシ　オ」

一 又云セコニコメタル鹿モ友ニ目ヲカケスノ人カケニカヘラス向タル方ヘ思切テ

マヒラニニクレハイクラ人アレトモ必ニケラル、也其定ニ他力ヲ深信メ万事

ヲ知ス往生ヲ遂ト思ヘキ也

一 上人ノ念仏七万遍ニ成給テ後ハ晝夜ニ余事ヲ雜ヘ給ハサリケリサレハ

其後人ノ參テ法門尋申ケルニハ聞給カト覺シクテハ念仏ノ御

聲ノ少シヒキク成給許ニテソ有ケル一向ニ念佛聞給事ナカリケルトナン

一 又上人宣ハク阿弥陀經ニハ只念仏往生許ヲ説給トハ心得ヘカラス文ニフシシ隱顯

有ト雖トモ廣略義ヲ以テ心得レハ四十八願ヲ悉説給ヘル經ナリ

舍利弗如我今者讚嘆阿弥陀仏不可思議功德ト云リ阿弥陀

仏ノ功德ハ卽四十八願也念仏往生ヲ説ハ其中ノ第十八願ヲ

指也

一 所詮決定心ヲ生セハ往生スヘキ也。

私案

決定心ヲ生セスハ往生スヘカラサル歟

煩惱罪惡等ノ往生ヲサヘ障サルヲハ凡夫ノ心トノハ覺知スヘカラスト

イヘトモ本願ニ相應スル程ノ念仏申タランニハ其ヲ障礙ノ往生ヲ

妨ル罪ハ有ヘカラス往生ハ念仏ノ信否ニ依ヘシ更罪惡ノ有無ニハ

依ヘカラス

一 見思塵沙無明ノ煩惱カ万ツノ障礙ヲハスル也念仏ノ一行ハ此等ノ

煩惱ニモ障ラレス往生ヲ遂十地究竟スル也他宗ニハ實教ニモ

權教ニモ密教ニモ顯教ニモ十地究竟スル事ハ漸頓ヲ

セツトシ

論セス極タル大事也然ニ只念佛ノ一行ニ依テ往生ヲ遂十地

ノ願行自然ニ成就スル事ハ誠ニ甚深殊勝ノ事也トソ宣ケル

一 淨土ノ法門ヲ演給ニ先聖道淨土ノ二門ヲ分聖道難行ノ

謂レヲ仰ラル、ニ殊ニ天台宗ニ對ノ尺給ヒ四種三昧ノ難行ナル事ヲ

ノ給テ南岳大師入滅ノ刻ミ諸ノ弟子ニ告テ云ハク汝等方等

般若四種三昧ニ於身命ヲ顧ス行スヘクハ我レ十年世ニ有テ

汝等ヲ供給スヘシトノ給ニ苦行叶難ニ依テ弟子等返答ニ及ハ

サリシカハ大師入滅シ給キ師既ニ入滅セントシ給ヘルカ暫モ

存命セントノ給ハンヨハ何ナル妄語ヲ構テモ師ノ命ヲ惜ン爲ニハ

修行シテントコソ申ツヘケレトモ始終叶ヘカラサル故ニ返答セスシテ

止ニシカハ師則入滅シ給キ何況當時ノ我等ヲヤ傳教大師　オ」

弟子達ニ四種三昧ヲ一ツ、當テ、修行セサセラル、事侍キ慈覺

大師ハ常坐三昧ニ當テ修行シ給ケルニ常坐難行也トテ

改テ常行三昧ト成ト申セリ如此ノ修行ハ上古ヨリ修シ

難事顯然也何況當世ノ凡夫ヲヤトテ聖道門ノ難行ナル

事淨土門ノ修易キ様コマ／＼ト仰ラレテ所詮末代ノ仏法修行

其證ヲウル事只念仏ノ一行也是則弥陀ノ本願ニ順スルカ

故也ト宣ケレハ信心實ヲ至シケリ

一

慈眼房法然ニ對シテ大乘ノ實智發サテ淨土往生シテンヤト

宣ニ往生シ候ハント答申時何ニサハ見エタルソトノ給フ間往生要

集ニミエテ候ト申スニ其ハ往生要集ノ裏ヲミ給ヘルソトノ給間イサ

誰ウラヨミタルヤラント申タレハ聖腹立シ給ケリ

一

或時上人天台智者ノ本意ヲ探リ圓頓一實ノ戒躰ヲ談給ニ

慈眼房ハ心ヲ以テ戒躰トスト云ヒ上人ハ性無作ノ假色ヲ以テ戒

一 鉢トスト立給フ其後慈眼房上人<sup>ノ</sup>之義ニ付歸服セラレケルトナン  
上人弘法大師ノ御作十住心論ヲ難給條々多カリケリ或時弘法夢中ニ

此難ヲ會尺シ給事有ケレハ上人云ク此夢告ヲ案ルニ難申義皆以テ

大師ノ御心ニ相契<sup>カキ</sup>ヘルナルヘシ凡ハ後學畏ヘシトテ學生ハ必シモ先達

ナレハト云事ハナキ也彼如來滅後五百年ニ五百ノ羅漢集テ婆

娑論ヲ造レリシニ九百年ニ世親出テ俱舍論ヲ造テ先ノ義ヲ破シ

給キ義ノ是非ヲ論ン事ハ強ニ上古ニモ畏マシキトソ

一 元久元年八月ニ上人癯病ヲ煩給事有ケリ月輪殿安居院

法印聖覺御導師ニテ冥助ヲ仰カレ御祈請有ケリ其後說法

大底ハ大師釈尊猶衆生ニ同給時ハ常ニ病惱ヲ受療法ヲ用

給況凡夫血肉ノ身爭カ其愁ナカランヤ然トモ淺智愚鈍ノ

衆生ハ此理ヲ知ス定テ疑心ヲナサンカ上人ノ化導既仏意ニ契フ

故ニ親リ往生ヲ遂ル者其數ヲ知ス然ハ諸仏菩薩諸天龍神

爭衆生ノ不信ヲ歎サラン四天王仏法ヲ守給ハ、必我大師上人ノ

病惱ヲ愈シ給ヘト苦ロニ申宣ラレケレハ本尊善導ノ御影ノ御前ニ

異香頻ニ薫シ上人モ聖覺モ共ニ癯病落ニケリ實ニ末代ノ

奇特其比ノ口遊ニテソ在ケル オ」

月輪殿・藤中納言光親卿ハ此時代之人也

一 禪定殿下ハ忠仁公十一代ノ後胤累代攝録ノ臣トノ朝家ノ憲政<sup>ケンセイ</sup>

詩歌ノ才幹君是ヲ許シ世此ヲ仰キ奉ル榮花重職ノ豪<sup>オウ</sup>

家ニ遊ヒ給ト云ヘトモ偏ニ順次往生ノ御望深カリケリ去年建永

元年三月七日後ノ京極殿俄ニ陰レサセ給キ御歲僅カニ卅八ニソ

成給ケル此ニツケテモ弥今生ノ事ヲ思食捨テ一筋ニ後生菩提ノ

御營許也

一

上人左遷ノ後月輪ノ禪閣朝暮ノ御歎淺カラス日來ノ御不食弥ヨ

重ラセ給大漸ノ期近付給フ藤中納言光親卿ヲ召テ仰置レケルハ

法然上人年來歸依ノ至定テ存知有ン今度ノ勅勘ヲ申免

サスノ謫所ヘ遷ラレヌル事生テ世ニ在甲斐無ニ似リ然而嚴旨

緩<sup>ニル</sup>カラス左右ナク申ン事恐覺ル故ニ後日ヲ期ノ過所ニ既終焉

ニ臨リ今生ノ恨只此事ニアリ我他界ニ趣ト云トモ連々ニ御氣色ヲ

伺ヒテ恩免ヲ申行ルヘシト書<sup>クトキ</sup>口說仰レケレハ光親卿仰ノ旨更如在ヲ

存ヘカラサル由申テ涙ヲ流レケリ

一

恩免有ト云トモ猶洛中ノ往還ヲ許サレサリシカハ攝津國勝尾寺麁<sup>ウ</sup>

住給勝尾寺ノ陰居モ既ニ四ヶ年ニ成リヌ花洛ノ往還猶許サレサリシニ

建曆元年ノ夏比上皇<sup>後鳥羽院</sup>八幡宮ニ御幸アリシ時一人ノ倡妓攢云

陽明文庫藏黒谷上人繪詞拔書

星災ニ親疎ナシ只善人ニ與ス王者ノ德失ニヨリテ國土ノ  
治乱アリ我南海ノ邊邑ニ訪ヘキ事有テ日々ニ往反ス苦哉

近代君闇臣曲テ政濁リ人患王城ノ鎮守百王ノ宗廟連々ニ

評定ノ事アリ天下逆乱率土荒廢セン定テ後悔アラシ敷ト

還御ノ後近臣等奏申サク倡妓カ託宣只事ニ非サランカ

凡天ハ德ニ勝ス仁ヨク邪ヲ却國土ヲ治ル計德政ニハシカス天

藥ヲ却ル術仏法ニ歸スルニアリ專修念仏停廢法然房配流尤

宥メ御計有ヘキヲヤト勅答猶明ナラサルニ同年七月ノ比上皇御

夢想ノ御事御シキ蓮花王院ニ御參有ケルニ衲衣ヲ著セル高僧

近付參ノ奏云法然房ハ故法皇並高倉ノ先帝ノ円戒ノ御師範也

德ハ賢聖ニ等シク益當今ニ普シ君大聖ノ權化ヲ以テ還俗

配流ノ罪ニ處ス咎五逆ニ同シ苦報恐レサランヤト此事驚キ思食

テ藤中納言光親卿ニ密ニ御夢想ノ次第ヲ仰下サル彼卿折ヲ

エテ早く此人ノ花洛ノ往還ヲ許サルヘキ旨頻ニ奏申サレ

ケレハ同十一月十七日彼卿ノ奉行トノ花洛ニ還歸アルヘキ由烏頭

變毛ノ宣下ヲ被リ給ヌ

其後幾クノ歲月ヲ經ス僅ニ十ヶ年ノ間ニ承久ノ逆乱發テ



天下ノ乱ニ及キ倡妓カ託宣今思合セラレ侍リ

一 上人ノ没後順德院御宇建保堀河院御宇貞應嘉祿四

條院御宇天福延應度ノ一向專修停止ノ勅ヲ下サル、事

有シカトモ嚴制廢レ安ク興行止難クノ遺弟<sup>ユイ</sup>ノ化導都鄙ニ

普ク念仏ノ聲洋々トノ耳ニ滿リ是豈止住百歲ノ仏語

虛カラスノ漸利物偏増ノ益ヲ顯ニ非ヤ

一 爰ニ上野國ヨリ登山侍ケル並榎堅者定昭深上人念佛弘通ヲ

疾ミ<sup>ソネ</sup>彈選<sup>ダン</sup>扨ト云破文ヲ造テ隆寛律師ノ庵ニ送律師又

顯選扨ト云書ヲ注ノ此ヲ答其詞云汝カ僻破ノ當ラサル事譬ハ

晴天ノ飛礫<sup>リヤウ</sup>ノ如トソ欺カレテ侍ル

一 豈ハカリキヤ戰場ヲ以テ往生ノ門出トシ惡徒ヲ以逆緣ノ知識ト<sup>ウ</sup>

スヘシトハ善惡不二ノ理邪正一如ノ掟<sup>オキ</sup>テハ山門ノ使ナラハ定テ聞知ラン

自他諸共ニ九品蓮台ノ同行トナリ怨親同ク七重寶樹ノ

新賓タラント云テ武威ヲ振ヒケレハ使者退散ノ其日ハ暮ケリ

一 上人云念仏ニハ甚深ノ義ト云事無只念仏申者ハ必往生スト知斗也

何ナル智者學生ナリト云トモ宗ニ明サセラシ義ヲハ爭カ作出テハ云ヘキ云々

一 又云稱名念仏ハ様ナキヲ以様トス身ノ振舞心ノ善惡ヲ沙汰セス念仏

ヲ申セハ往生スル也云々

一 又云人ノ手ヨリ物ヲ得ンスルニ既ニ得タラント未エサラント何カ勝タルヘキ源空ハ  
ステニエタル心地ニテ念佛ヲ申也ト云々

一 四修 無間修 無餘修 殷重修 恭敬修 三心至誠心 深心 廻向發願心

一 五種正行 讀誦正行 觀察 禮拜 稱名 讚歎供養

一 又云自然具足ノ三心ト云事在穴賢ノコトノシク三心ノ沙汰ヲ申ヘカラスト云々

一 又云自力ト者聖道門也自ノ三學ノ力ヲ憑テ出離ヲ求ル故也

他力ト者淨土門也淨土ヲ求人ハ皆自ノ機分ヲ出離ニ不能ト

知テ佛力ヲ憑故也 以上下卷了 オ

西郊 自然ノ患習 柵也 惓

歌法 制法ニ拘ラスハ 禁遏 四魔 三障芬馥

一 連綿トノ絶ス 鬱 所司專當 頓宮ノ藤五郎

一 山德ヲ慕ヒ滿寺余波ヲ惜テ万仞ノ霞ヨリ出テ九重ノ雲ニソ送奉リケル

一 厭離穢土ノ便トノ欣求淨土ノ思ヲ増ヘシ

一 此浦ノ海人也幼ヨリ漁ヲ業トノ朝暮ニ鱗ノ命ヲ絶テ世ヲ渡ル計コト、ス

一 攝津國經ノ嶋ハ平相國安元ノ宝曆ニ一千部ノ法花經ヲ

石ノ面ニ書寫ノ漫々タル波ノ底ニ沈ム鬱々タル魚鱗ヲ濟ンカ爲也

上人ノ遠流ニ依テ貴賤ノ悲聲巷ニミチ道俗ノ慕涙地ヲ潤ス

與ヲ昇カク 金剛草履サウリ 長途タツキヨ 謫居 甘心清濁聲

花洛ヲ出テ夷境ニ赴キ給オモム

花洛 御氣色キシヨク 被カウフル 嘔クワノ 慰ナクサム 上人左遷セン

諸佛濟度誓深冥衆護持ノ約懇也 機嫌餘波ナヨリ ウ

逆鱗リョリン 老邁ロウマイノ身 非御過トヨ 延促ノツクマル 立敷タツキ

隨喜 許可灌頂ヲ授ケ宗ノ大事ヲ殘ナク此ヲ傳フ

異香芬馥フンフス 頓顯密ノ棟梁トクケンミチ 山門ノ英傑也エイゲツ

牛角ノ論 假名ノ阿蘭若樓アランニヤ 藁息ハクイ

龍樹菩薩作云々 面受口決 顯然 北ノ頰キツ 誅ツ

只佛法ノ事ニオイテハ少々ノ事ニアナカチ日ノ善惡ヲ撰マス只善根ヲ思立ヲモチテ吉日トスヘシ云々

大論之文云

於佛法中日無好惡 塗籠スリボ 口解クゲ

老ラクノ行末兼テ思フニハツクウレシ西ノ木ノ杖 西土ノ託生ヲ心ニ係カケテ

發露滌泣 持成セテナク 作毛カササル 若冠田也 慙ネシホ 濟スナフ

射獵シヤン 勲ネノコロ 驗ンルシ 少緣ヲホロケ

陽明文庫藏黑谷上人繪詞拔書

一心ニ彌陀ヲ念シ三業ヲ西方ニ運ケリ

生付ノ儘 行末 三侯ノ松 摺形木 阿伽陀藥 オ

老骨ヲ策遣戸 光明 赫奕 身毛 豎 珍敷

奉加 移住 上人ニ繫屬結縁 都鄙 敷

投入 寄宿 娘 法然上人墳墓知恩院之云 乎 素意

脇息 八輻輪 日光映蔽 袈裟 寄進狀

奇瑞ヲ顯シケリ 素懷 心ニ係

臆 生死ノ絆 佛ノ五眼具足 仏法天惠

無始ヨリ已來常沒流轉ノ出離其期ヲ知ヌ身ノ忽ニ他力ニ乗ノ往生ヲ遂ケ

永生死ノ絆ヲ切シ事偏ニ是上人御教誠ノ故也トテ

梅尾明惠作摧邪論三卷 莊嚴記一卷 述懷抄 摸止

往生要集 群疑論

文名

圓宗文類 惠心往生要集 選擇集淨土決疑抄

並複堅者定昭作彈選撰

面白詞次不審ノ詞書之畢

仁明天皇ノ御後西 直人 善巧花洛 早四明ニ登テ

邊鄙ノ塵ニ混セシ事ヲ惜テ早台嶺ノ雲ニ送ラン事ヲソ支度シケル

眼前ノ無常見テ夢中ノ榮耀厭ヘシ有爲ヲ厭無爲ニ入ハ眞實ノ報恩也ト云リ

晨昏ノ禮ヲ致シ水叙ノ孝ヲ勤ムヘシ 慰母堂 叡岳

千重ノ霞ヲ分テ九禁ノ雲ニ入獨木カケハシアヤウク九花色メツラシ

籤ヲサシテ法器ニ逢ヘキ前兆也三大部ヲ亘面々ニ印可シ

四教五時ノ癡立鏡ニカケ三觀一心ノ妙理玉ヲ瑩ク二字ヲ奉リ

嵯峨ノ清涼寺本尊釋迦善逝ハ西天ノ雲ヲ出テ東夏ノ霞ヲ分テ

三國ニ傳ハリ給ヘル靈像ナレハ取分懇志ヲ運給ケルモ理ニソ覺ケル

他宗推度ノ知恵 不審 胡粉白者歟其相ヲ模止

身毛 豎 オ

崇重比類ナシ 一宗ノ祕蹟ヲ受ケ淨土門ノ樞鍵ヲ枳

釈文ヲ研竅シ早一家ノ狼藉ヲ留メ末代ノ念仏ヲ印持センカ爲ニ

後昆末代念仏授手印ト名ク著述僉義

母指春秋七十七夏薦六十四也公請 懇翼

五濁監漫論義詰ラス練行年フリテ薰修日新也寢食看病歟

風痼息監觸悔謝ノ云ク口解綱斑ヲ辭ノ念珠

上人一言ノ智弁ヲ聞テ下愚三卷ノ謬書ヲ燒ケリ模疊

陽明文庫藏黑谷上人繪詞拔書

隨分ノ噓ウソ噓ウソヲ捧タテマツ 瑜伽壇ノ上ニハ四曼不離ノ英ヲ翫フサヒ觀念

ノ窓ノ中ニハ五相成身ノ月ヲ澄シテ三密ノ法將四明ノ智德タルヘキ

器用ナリ上人遷謫ウツク練若ノ棲聚落動オモヒ、シ ウ

德闌タケ上人ノ調鍊ヲ得給 劬勞ロウ 良匠 年闌タケ

掟オキテ 策ハケミ 嗜タシナム 齡傾儘マ、ニ 法門ニ契カガフ 誑ヘソラフ 簡ニラフ

顯眞ノ消息云我仏ヲ念レハ仏我ヲ照給フ光明我ヲ照ハ罪障

消スト云コトナシ藥王樹ニ觸ル、者ハ毒ナレトモ藥トナル

占蔔ノ林ニ入ヌレハ余ノ香ヲカ、ス淨名ノ室ニ入ヌレハ功德ノ香ヲ

ノミカク此山ニ入ン人ハタ、念佛ノ香ヲノミカキ念佛ノ聲ヲノミ

キク事ニナシ候ハ、ヤ菩薩ヲハ大士ト申奉ル細カニ

慈鎮ニ和尚慈圖號號吉水僧正ハ 法性寺殿忠通公ノ御息青蓮院ノ

覺快法親王鳥羽院第七宮ノ附弟山門ノ樞鍵ベツケン祕教ノ棟梁トシ

三昧ノ一流祕事ヲ盡シ奧義ヲ竟メ山務四ケ度興隆

昔ニ超名望世ニ勝給ヘリ然レトモ宿習ノ開發シ給ケルニヤ

頻ニ世間ノ榮耀ヲ厭ヒ深ク出離ノ要道ヲ尋陰遁ノ オ

志淺カラスノ弥々籠居ノ暇ヲ申サレケルニ敢テ勅許

ナカリケレハ其本意ヲ遂ラレスト云ヘトモ或時暫西山ノ

善峯寺籠居ノ心閑ニ勤メ行レケルニモイツシカ勅使

頻リニシテ遂ニ召出サレ給ニケリ其後ハ陰居ノ棲モ叶ハ  
サリケレハ常ニ上人ニ御對面有テ底下ノ凡夫開悟得脫ノ

要義ヲ談セラレケルニ上人諸宗ノ大綱ヲ舉テ一々ノ

義理ヲ盡サル、ニ皆是上代上機ノ爲ノ教ニノ末代下

根ノ類ニ及ヒ難シ淨土ノ宗旨稱名ノ本願ノミソ苦海ノ

船師愛河ノ橋梁ニテ愚鈍下智ノ當機ニ相契ヘルトテ

聖道淨土ノ奧儀演ラレケレハ和尚隨喜ノ御心懃

ニノ一乘円頓ノ戒ヲ受散心稱名ノ行ヲソ崇重

セラレケル本願ノ旨趣ヲ訪ヒ極樂ノ往生ヲ望ミ　ウ

御シケル餘ニヤ建久元年九月廿二日ヨリ七ケ日ノ

間吉聖眞子拜殿ニテ實円實全仁慶良尋以下

廿余人ノ門弟ヲ伴テ且弥陀ノ内證ニ資シ且ハ

垂跡明神ノ外用ヲ飭ンカ爲ニ慈覺大師ノ古風ヲ

慕ヒ西方懺法ヲ行ハレケル　一前兆　一聚ノ雲

僻胤　知識ニ謁テ發心　一其峯際メテ高シ　脇士

掃　船一艘　一畫工　唐朝

陽明文庫藏黒谷上人繪詞拔書

一 嵯峨ノ清凉寺尺迦堂一尊意ニ契事カナヘル

一 合掌低頭テイツ 一 三昧發得ノ亂法然自筆也

一 其光ヲ糺タシ 恩賜オンシ 一 窮屈キウクツ 老邁マイ

一 符合フウフス 一 瑞夢ズイム 一 異香ヲ聞カク 聞之字歟 准后シユシコウ オ

一 又云心行ニ就テ別ノ不審ハナケレトモヒシトモナトヤラン物ノ

覺サラン時ハアラタツトヤアラ 忝カガシケナヤ大事ヤナト阿弥陀仏

ヲ思付奉ヘシ自然ニナツカシクナル心在ヘシ苦ノ至重ケレハ叫ヤケラ

聲高シ身ノ無有出離ノ縁ノ理ヲ深思知ハ弥助給ヘ

アマタ仏ト聲ヲ舉テ申サルヘキ也云々

一 一切ノ煩ハ只我心ヨリ發スル又ハ穢土ノ習也譬ヘハ

奥中ニ出タラン船ノ惡風ニ相タランニ或ハトモヘ行シヘエ行ント

云ハンカ如シ皆是愚ル義ナルヘシ此等ノ思ニ住ノ強ニ住所ヲ改ル義有ヘカラス

本云

永享九丁巳年八月日於江州金勝寺書寫之畢

右筆玉泉坊覺泉

持主正玉

志ヲハ今一際ハケミ給ヘシ



皆文安四年十月廿五日書寫之了

王法ヲハヒタイニアテヨ仏法ヲハワキニハセメト云々 ウ」

一 念仏ハ実ニ何ナル甚深ノ義ヲ存ストモ修行セスハ無益也ト云々

一 又云念仏ノ心ヲ勸ル媒チ無常ナトヲ常ニ心ニ懸ンハ又大切也云々

一 第一決定往生ノ信心一期ニ死ン事ト往生セシム事トハ同様ニ思定ヘキ也云々

其故ハ不取正覺ノ願發テ已ニ成仏シマシマス仏ノ此念仏者一人ヲ

迎シトテ之ノ法藏比丘ニ還ラセ給ハン事ハ有ヘカラサル也

一 只人ハ無益ノ我執ヲ止メテ敵ヲ害セント思人ヲニクシト思心ノ如人ニ

知レスメ上ニカサラス念佛申サント思者ナラハ十郎十生百郎

百生誰カ一人モ漏ルヘキヤ相構テ人目ニ立ヘカラスト云々人ヲハ

人カ損スル也ト云々

一 遊蓮房云予祖師ノ跡ヲ追テ三寸ノ火舎ニ一匝ノ香ヲ盛テ其

香ノ燃ハツルマテ合掌ノ毎日三時高聲念仏スル事久ク成ヌ

其間ニ靈瑞ヲ得コト度々也云々

一 寂惠上人云ウルハシク往生ノ心有ハ外ニ行ンモ内ニ願ンモ共教ニ

叶侍ヘシ譬ハ器ノ大小雖異ト水ヲ入ニ皆滿カ如シサレハ我機分ニ隨

往生ノ志ヲ致スヘキ也云々 オ」

一 隆寛律師病ノ床ニ筆ヲ取テ身ノ一期ノ事ヲ注サレタリ是ヲ

羈中吟ト名其詞云

我聞ク達磨和尚ハ配所ノ藁ニ跡ヲ殘シ慈恩大師ハ懷土ノ

庵ニ名ヲ止ム一リニ仏心宗ノ根源一リニ法相宗ノ高祖也大國

猶然也況ヤ邊州ヲヤ上古又如此況ヤ末代ヲヤ苦海安カラス

浮生夢ノ如シ只聖衆ノ來迎ヲ望更ニ有爲ノ遷變ヲ痛マス

トテ一首ヲ詠給 御名ヲヨフ聲澄宿ニ住月ハ雲モ霞モサヘハコソアラメ

一 智度論ニ云身口ニ不レハ犯セ漸々ニ其意清淨也其惡緣ナト増盛

ナカラン所ニ少々ノ難ヲハ思忍テ必安堵スヘキ也一切ノ煩ハ只我心ヨリ

發ル也又穢土ノ習也譬ハ奥中出タラン船ノ惡風ニ相タランニ或ハトモヘ

ユカンヘヘエユカント云ンカ如シ皆是愚ナル義ナルヘシ此等ノ思ニ住ノ強ニ住

所ヲ改義有ヘカラス

一 人ニ會ニハ只其時間答往復スルノミニ非ス暫シハ其人去テ後モ猶

其言ナトノトカク覺テ忽テ道ノ妨トナル事全ク談語口業ニ

在リ能々是ヲ愼ムヘシ

勅修四十八卷傳との異同を検すると次の如くである。傍線を以て示した所は相違點である。

○夫以我本師……たれかこのころざしをよみせざらむ（第一卷一段）

○抑上人は……秦なやむ事なくして男子をうむ（第一卷一段、二段）

○所生の小兒……たかはずなん侍りける（第一卷三段）

○あるとき上人月輪殿にして、山僧と參會の事侍しに、かの僧淨土宗を……（第五卷五段）

○一心専念……念々不捨者……彼佛願故……（第六卷一段）

○三重の念佛を……のそむにつたり（第四十六卷一段）

○故上人并阿に……至誠心と云は、まことしく往生せんと……法然上人より……たれか信受せざらむ（第四十六卷五段）

○天王寺とみられけるも由緒なきにあらず、この寺は極樂補處の……つとめ給ひ、命長七年二月十三日黒木の臣を

御使として、善光寺の如來へ……その御ことばには、名號七日稱揚已、以斯爲廣大恩……護念と侍けるに、如來

御返報には、一念……豈不護とぞあそばされける。御表書には上宮救世大聖の御返事と侍けり。この御消息にこ

そ……歸すべきものなり。（第十六卷二段）

この段は四十八卷傳と少しく異なる文で、恐らく四十八卷傳より抜き書したものではなからう。

○僧都さしいりて、いまだ居なをらぬほどに……申されければ、僧都申さるゝやう、たれもさは見をよびて侍り、

……申されければ、これうけ給候はむために、まいりて候つるなりとて、僧都やがて退出し給にければ、初對面

の人、一言も世間の……目鼻をとりはなちて……仰られける（第十六卷三段）

○園城寺の長吏大貳僧正公胤、いまだ大僧都なりし時、上人を誹謗して……讀誦大乘の業を廢して、……言説なか

りけり（第四十卷一段）

○僧都以外に上人に歸敬したまひ、淨土の法門を談じ、かねて餘事にわたる……………直されたり、常に見參せは：

…三卷をやかれにけり（第四十卷一段）

○上人終焉の期ちかづき給て、勢觀房念佛の安心、年來御教誠にあづかるといへども、なを御自筆に肝要の御所存一ふであそばされて、給はりて、のちの御かみにそなへ侍べらんと申されたりければ、御筆をそめられる狀云、……念佛の心をさとりなどして申す念佛にもあらず、……四修など申ことの候は、決定して……二尊のあはれみにはづれ……學せりども一文不知の……御自筆の書なり（第四十五卷一段）

○上人の御病中に、いづくよりともなく車をよする事ありけり。……おりふし看病の僧衆あるいは、あからさまにたちいで、あるいは休息などして、ただ勢觀房……念佛の法門など御のちには……上人こたへ給はく、源空が所存……ただびとゝおぼえざりけり。さる程に僧衆などかへりまいりければ、勢觀房ありつるくるまのゆくゑおぼつかなくおぼえて、をいつきて見いれむとし給ふに、……貴女たれひとにか侍らんと……仰られけり。この事末代には、まことしからぬ程におぼゆるかたも侍れども、ちかく解脱上人明惠上人なども、かやうの奇特おほく侍けり。この上人はいますこし宿老にて、行徳もたけ、三昧をも發得せられて侍れば、權化のよしをあらはし給はむ事、おどろくにたらず。勢觀房まのあたり……參詣をなむせられける（第四十五卷一段）

○このひじり所勞のとき、自來の安心を印治決定せむがために……かの御返事云、稱名念佛にはしかず……觀行いるべからず（第四十八卷二段）

○文治二年の秋……このよしをつけ仰られたりければ、弟子三十餘人を……門徒以下の碩學ならびに大原の聖たち

……衆徒をはじめて見聞の人……器にあらざるゆへに、……機教あひそむくゆへなり……ただしこれ涯分の自證をのぶるばかりなり。……感歎しあへりける（第十四卷二段）

○受教と發心とは……仰られける（第十九卷三段）

○決定往生の念佛に、虚假とて……まことの心にて申べし。いふにかひなきおさなきもの、もしは畜生などにむかひては、かざる心はなけれども、朋同行は……順次の往生をとげざればなり。さりとして獨居もかなはず、いかゞして人目をかざる心なくして、まことの心にて念佛すべきといふに、つねに人にまじりて、……夜にはかざるべからず、朝にても晝にても、暮にても、人のきくはゞかりならむ所にて……往生なむぞ疑はむと仰られければ……（第二十卷一段）

○眞偽の二類なり……身の利益をばかへりみず……むまれたるところなり（第二十卷二段）

以上上巻で、第十六卷二段のみは問題とすべきで、他は四十八卷傳よりの拔書といつても差支がないであらう。

○上人たゞ諸宗の……白象にのりて……奇特なり（第七卷一段）

○上人黒谷にして……あをき小くちなは、……かの法蓮房……さてかへりてみれば……法蓮房しかぐとこたへ申さるゝに、上人默然として……底へなむかへり入ける。……龍宮にありしゆへに、龍神うやまひて……侍ける

（第七卷二段）

○上西門院ふかく……七箇日のあひだ……氣色也。……侍けるにや（第七卷三段）

○上人祕密の窓にいり……（第七卷四段）

○別當入道惟方卿の娘……身の毛いよだち……（第三十八卷二段）

○或時秉燭の程に……いまだ燈明など……照し見給。そのひかりのあきらかなる事……（第八卷一段）

○上人仰られけるは……來迎したまふ佛よ、かしこくぞおもひより給ける。心をしづめて……小阿彌陀經、これを淨土の三部經となづけて、往生極樂のやうをとき給へる經なり。むかし……平等に往生せさせんれうに、われ佛に……さづけられけり。上人給仕の御弟子のなかに、信心堅固のほまれありき。このひじり不審なる事どもを、たづね申けるにつきて、上人御返答の條々（第四十五卷二段）

○念佛の機はたゝむまれつきのまゝにて……一願に萬機をおさめておこし給へる本願なり。……沙汰をばせずして、ねんごろに念佛だにも申せば……念佛往生の義を、たかくふかく申さん人をば、つや／＼本願をしらざる人と心得べし。源空が身も檢校どもがくらひにてぞ往生はせんずる。もとの法然房にてはえし候はじ。としごろ習たる智慧は、往生のためには要にも立べからず、されども習たるしるしには、かくのごとく知たるは、はかりなき事なり。淨土一宗の諸宗に……不捨のちかひにこもれるなり。このゆへに諸宗にこへ……申なり（第四十五卷二段）

◎上人の給はく、現世をすぐべきやうは、念佛の申されんかたによりてすぐべし……一所にて申されずは修行して申べし……在家になりて申べし、在家にて申されずは遁世にて申べし。ひとりこもり居て申されずは、……共行して申されずは、一人こもり居て申べし。衣食かなはず申されずは、他人に……申べし。他人のたすけにて申されずは自力にて申べし。妻子も從類も……ゆめゆめもつべからず……（第四十五卷二段）

○聖道門は……信伏しきとぞ仰せられける（第六卷七段）

○毗沙門堂の法印明禪……最勝講の聽衆に参たりしとき、……見聞のともがら、はしりまはるありさま……餘算いつまでとか期べき。世上の……治定せりとぞ申されける。上人の念佛興行大にそねみそしりて……かの法印は天

台の……選擇集を披見の後、ひとへに在世の誹謗をくひて、ふかく上人の勸化を……他事なかりしかば、そのきこへ都鄙にあまねく往生をこひねがふ輩たづねいたらずといふ事なかりき（第四十一卷一段 二段）

○又のたまはく自他宗の學者……おほせられける（第五卷一段）

○上人の給はく、口傳なくして淨土の法門を……順次の往生をとぐるなり（第二十一卷一段）

⑥又云他力本願に乗ずるに二あり、乗ぜざるに二あり……しかるに本願の名號を……この道心にて往生すべからず、これ程の道心は……本願に乗ずるなり（第二十一卷一段）

②又云念佛申には……まいる也（第二十一卷一段）

③又云南無阿彌陀佛といふは別したる事には……三心具足の名號と申也（第二十一卷一段）

④又云縱餘事をいとなんとも……（第二十一卷一段）

⑤又云佛告阿難……といへり。名號をきくといふとも……念佛すべきなり（第二十一卷一段）

⑦又云せこにこめたる鹿も……いくへ人あれども……思べき也（第二十一卷一段）

○上人念佛七萬遍になされてのちは……餘事をまじへられざりけり。……念佛のこゑすこしひきくなり……なん（第六卷五段）

○又上人の給はく……念佛往生ばかりを説くとは心得べからず……功德といへる阿彌陀ほとけの功德は、四十八願也……さす也（第二十四卷一段）

①所詮決定心を生せば……凡夫の心にては覺知す……罪惡の有無にはよるべからざるなり（第二十四卷三段）

②見思塵沙……障礙をばなす也。……とぞ仰られける（第二十四卷三段）

○淨土の法門をのべ給に……聖道難行の様を仰らるゝに殊に……なる事をのべ給て南岳大師……諸の弟子につけての給はく、……始終かなふべからざるあひだ、返答せずして……入滅し給へり。何況……、信心まことをいたし、低頭合掌してかへりにけり（第二十四卷四段）

○慈眼房は受戒の師範なるう……あの御やとよび給へば、とまりて縁にゐて候と申に、大乘實智おこさで淨土に往生してんやと……往生候なんと答申とき……申に往生要集のうちを見給たるぞとの給間、いざたがうちを申ざるや覽と申たれば、聖腹立て枕をもちてなげうちに打給へば、……（第十三卷五段）

○あるとき天台智者の本意をさぐり……立破再三にをよび、問答多時をうつすとき、慈眼房腹立して……師かへりて弟子となり給にけり（第四卷一段）

○上人語てのたまはく、弘法大師の十住心論は、義尺によりてつくり給へるに……その義を難じたてまつらんとするとおぼしくて、夢さめぬ。のちにこれを案ずるに、難じ申義みな大師の御心にあひかなへるが……、御意にかなひたるがみゆるなるべし。げにもよく難ぜられたりとおぼしめせばこそ、夢にもさまぐに會尺し給つらめ、凡は後學畏へしといひて……、上古にもおそるまじきものぞとぞおほせられける（第五卷二段）

○元久元年八月に……月輪殿きこしめしおどろきて……安居院の法印聖覺に御導師參勤すべきよし、仰らるるに……その説法の大底は……聖覺自嘆して、先師法印は、……名覺をほどしき。聖覺が身には、この事第一の高名なりとぞ申されける。まことに末代の奇特、そのころの口遊にてぞありける（第十七卷二段）

○禪定殿下は忠仁公……往生の御のぞみふかりける。御出家の後は數年上人を……御なげきをざりならず、去年建永元年……御いとなみなり（第三十三卷四段）



○上人左遷の、ち、月輪の禪閣……涙をながされけり（第三十五卷三段）

○恩免ありといへども……勝尾寺にしばらくすみたまふ。そのてらは善伸……（第三十六卷三段）勝尾寺の隠居も……  
烏頭變毛の宣旨をかうぶり給ぬ（第三十六卷五段）

○其後いくばくの……天下のみだれにをよびし……思あはせられ侍り（第三十六卷五段）

○上人の没後……利物偏増の益をあらはすにあらずや（第四十二卷一段）

○爰に上野國より登山し侍ける並覆の堅者定照……庵にをくるに、律師又顯選擇といふ書をしるしてこれをこたふ。  
その詞には、汝か……暗天の飛礫のごとしとぞあざむかれて侍る（第四十二卷一段）

○あにはかりきや戦場を……その日はくれにけり（第四十二卷二段）

○上人の給はく、念佛には深甚の義と……つくりだしていふべき（第二十卷一段）

○又云稱名念佛は様なき……（出典不明）

故上人は念佛は様なきをやうとす。たゞひらに佛語を信じて、念佛すれば往生するなりとて、またく三心のことをも仰られざりき（第二十卷二段）

○又云人の手より物をえんずるに……いづれか勝べき……念佛は申なり（第二十一卷一段）

○四修無間修……（出典不明）

○五種正行……（同右）

○又云自然具足の三心……（同右）

○又云自力と者……（同右）

以上下巻の終であるが、この下巻では確かに四十八卷傳より書き抜いたと認め難いものが二段程ある。◎を以て示した段である。次に雜記があつて、又拔書がある。これと前の上下二巻との關係も明白でないが、別の繪詞を書きつけたものと見るべきであらうか。

○慈鎮和尚……こゝろざしあさからずして、より／＼籠居のいとまを申されけるに……いつしか勅使ひまなくして、つめに召出され……散心稱名の行をぞ崇重せられける（第十五卷一段）本願の旨趣を……あまりにや建仁元年九月廿二日より……懺法をぞおこなはれける（第十五卷二段）

次に又雜記がある。

○又云心行ニ就テ……（出典不明）

○一切ノ煩ハ只我心ヨリ……（出典不明）

次に永享九年の奥書と文安四年書寫の語があつて、

○念佛ハ實ニ……（出典不明）

○又云念佛の心ヲ……（出典不明）

○第一決定往生ノ信心……（出典不明）

○只人ハ無益ノ我執ヲ……（出典不明）

○遊蓮房圓照は入道少納言通憲の子、信濃守是憲なり……舎兄修禪院の僧正信憲人にかたられけるは、三寸の火舎に……そのあひだ靈證をえたることたび／＼なり云々（第四十四卷五段）

○寂惠上人、ウルハシク往生ノ心有ハ……（出典不明）

○（隆寛律師）同年仲冬風病にはかにをかす。病床に筆をとりて、身の一期の事をしるされけり。これを羈中吟となづく。……月は雲もかすみもさへばこそあらめ（第四十四卷三段）

○智度論ニ云身口ニ不レハ……（出典不明）

○人ニ會ニハ只其時問答……（出典不明）

以上で終つてゐる。これを抜書全般を通してその順序をみるに、左の二ヶタ卷數、右は段數、

<div></div>	211	011
445	211	011
443	211	013
<div></div>	211	055
<div></div>	211	061
	211	461
	065	465
	241	162
	243	163
	243	401
	244	401
	135	451
	052	451
	172	482
	334	142
	353	193
	363	201
	365	201
	365	—
	421	071
	421	072
	422	073
	201	074
<div></div>		382
	211	081
—		452
	151	452
<div></div>		452
<div></div>		067
奥書		411
<div></div>		412
<div></div>		051
<div></div>		211

となる。これは四十八卷傳が完備してゐてそれによつたものであるならば恐らくこの様な順序にはならなかつたに違いない。一步ゆづつて手あたり次第に抜書したとも考へられるが、さうしたとしても、第二十一卷の條では順序が亂れた所があるし、又その詞章が四十八卷傳と全く一致するともいひ難い段がある。◎で示した段である。又出典不明として示した段がある。かくみると、四十八卷傳の完成する以前に、その原稿的なもの（殆ど現在のものと差のないもの）が存在してゐて、それによつて抜書をしたものであらうか。従つてその四十八卷傳も順序が十分に定つてゐなかつたものがあつたのであらうか。なほ雜記についてもまま四十八卷傳中の語と關係がある。更に考察を加ふべきであるが他日の研究をまらたいと思つてゐる。（四三、九、二〇）

